



の障害を生まれつきもっています。そして、保護者や教師たちは、社会性の障害には「ソーシャルスキルトレーニング」などを実施して、その改善をめざします。また、「コミュニケーションの障害に対しては、「発語促進」や「コミュニケーションプログラム」「PECS（絵カード交換式コミュニケーションシステム）」などの訓練を施して、発語や会話の促進に努めています。

それらに比べ、こだわり行動についてはどうでしょう。ASDの子どものこだわり行動は、その多種多様性が影響してか、本格的な取り組みがなされにくく、「ほうっておく」とか「見守る」などという消極的なかかわりがめだちます。これは、ゆゆしき状況です。事実、ASDの子どものこだわり行動は、そのままほうっておくと、こだわりの対象が「増える」こと、そして、こだわり行動自体が強く「固まる」ことがよくあります。さらには、こだわり行動の対象が自分の感覚に向けられて、外からは「見えなくなる」ことがあり、注意が必要です。

ASDの子どものこだわり行動は、「増える」「固まる」「見えなくなる」という恐るべき特徴をもっています。それを理解しないで、「注意しても変わらないからあきらめた」「本人の意思だから見守る」「好きなのだから好きにさせればいい」などという消極的かつ不適切な態度で接していると、事態はますます深刻化していきます。

まず、その実態を見ていきましょう。

先生、相談です。

こだわり行動の怖さと強み

6歳

男子

ASD

保育園に在籍

6

こだわり行動は ほうっておいてはいけないの？

「こだわり行動なんて、ほうっておけばそのうち飽きるから大丈夫」とか「飽きるまでやらせれば、満足してやめる」と言う人もいますが、放任や好き放題の対応で本当にいいのでしょうか。先輩の家庭などでは、それで大変な状況に陥っているケースを多く見ます。

■ 放置すると怖い場合がある

こだわり行動は、専門家の間では、強度行動障害の大きな要因としても知られています。しかし、こだわり行動の専門書や解説書は少ないので、実際の怖さは一般にはあまりよく知られていません。ここでは、こだわり行動を放置した場合の怖さを説明します。そして、⑨で改めて、対処の仕方を解説します。

■ 増える、固まる、見えなくなる

ASDの子どもは、こだわり行動のほかにも社会性の障害やコミュニケーション



「増える」

雄大くん(仮名)はASDで地域の小学校の特別支援学級に通う1年生です。その彼は、週に2日、火曜日と金曜日に放課後等デイサービスを利用していました。放課後等デイサービスは、雄大くんの場合のように、曜日を決めて利用する利用者が多いので、集うメンバーが曜日ごとに異なったりします。その結果、子どもたちの過ごし方も、居場所も、使うおもちゃや教材も、曜日によって違うのがあたりまえのようでした。

その環境の中、雄大くんのこだわり行動は「火曜日には、最初〇〇を使って〇〇くんと遊んで、〇〇時になったら職員の〇〇さんに宿題を見てもらい、〇〇のおやつを2個必ず食べて、〇〇時に〇〇のテレビCMを視聴してから、〇〇のおもちゃで遊んで、〇〇時にお迎えで帰る」、「金曜日は、まず先に職員の□□さんに宿題を見てもらってから、□□のテレビ番組を15分だけ見て、□□のおやつを1個食べてから、□□のおもちゃで遊び、そのあとにもう1個のおやつを食べ、決まった□□の本を読んで、□□くんと一緒に絵を描いて過ごして、□□時のお迎えを待つ」というように、曜日ごと、時間ごと、かわる人ごとに「増えて」いったのでした。

それを知った雄大くんの母親は、「放課後デイの利用をもう1日増やそうと思いましたが、こだわり行動がまた増えるかと思うと、二の足を踏みます」と言いました。

「固まる」

ASDの人のこだわり行動は、物事を「同一に保っていたい」という欲求が根っこにありますから、そこに加えられようとする「変化」への刺激に、みな過敏に反応します。その多くは、「阻止」や「回避」「逃避」そして「攻撃」などの「防衛的な行動」に表されます。変化の多い現代社会。ASDの人たちの防衛的な行動は自然と強められ、結果、こだわり行動もどんどんと固まっていきます。

雄大くんには野菜嫌いの偏食もあり、カレーライスも野菜を取り除いてからでないと手をつけない、というこだわり行動になっていました。それで母親が工夫をして、じゃがいもはすりつぶす、玉ねぎとにんじんはみじん切りにして煮込んでわかりにくくする、という工夫をしましたが、雄大くんは目ざとく野菜類を見つけては皿の外にのけ続けたそうです。

この体験の結果、雄大くんは次の「カレーの日」に、台所に立って母親の「隠し味」たるじゃがいもや玉ねぎ、にんじんの投入を阻止したといえます。それでも雄大くんの不信感とはけなかつたのでしよう、彼は家を出されるカレーライスにはいっさい手をつけなくなつて、給食でのカレーライスも拒むようになっていきました。

「見えなくなる」

幼稚園時代にトイレの自立が確立した雄大くんですが、小学校に上がってから、



見えなくなる

お漏らしが増えてきました。それで担任の先生が小まめに声をかけてトイレに誘うようにしましたが、雄大くんはそのつど「出ない」と帰ってきてしまい、そのあとにお漏らしをするという繰り返しでした。困り果てた先生方からは、「大人をからかっている！」という怒りや、「体の病気かもしれない」という不安の声があがりました。

やがて、授業を参観した教頭先生が、この憶測を否定する場面に遭遇します。それは、授業中に雄大くんが股間に手を当てながらもじもじとして、必死に何かをこらえている様子が見られたからです。「おしっこを我慢している」と瞬間的に察した教頭先生が「雄大くん、さあトイレに行こう！」とトイレに連れ出しますと、雄大くんはすんなりと便器におしっこをして、お漏らしを回避することができたのでした。

教頭先生は、その日の職員会議で「雄大くんはおしっこをぎりぎりまで我慢することに決めてしまっているようだ」と報告しました。つまり、雄大くんは、「おしっこのぎりぎりこだわり」で、感覚的に「我慢の限界」点に達しないと「排尿しない」と自己のルールを決めてこだわってしまっているのです。

■ 感覚のこだわりが高じた例はほかにも…

また、ASDで特別支援学校小学部2年生の徹くん（仮名）^{とま}の場合は、「空腹の

感覚」にこだわって、食べ始めるまでに長い時間を費やしました。彼は「いただきます」の合図が示されても、ほかの子どもたちが食べ始めてもおかまひなしで、ただじっとして、自分が「おなか減った」という感覚になるまで、待ち続けるのです。

そこに担任の先生が促したりせついたりしても、無視されるか、差し出した手を払い除けられるのが関の山でした。ときに徹くんは、給食の時間が終わっても一口も食べない状態で、自分の感覚を「待っている」ために、片づけができずに問題となりました。